

# 小学校体育科におけるゴール型ゲームの授業づくり

池田 拓人（和歌山大学教育学部） 青木 美波（和歌山市立雑賀小学校）

## 1. はじめに

小学校学習指導要領解説体育編(2018)には、ゲーム・ボール運動領域におけるゴール型の技能は、「ボール操作」及び「ボールを持たないときの動き」で構成されている。「ボール操作」はシュート・パス・キープなど、攻防のためにボールを操作する技能である。「ボールを持たないときの動き」は、空間・ボールの落下点に走り込む、味方をサポートする、相手のプレイヤーをマークするなど、ボール操作に至るための動きや守備の動きに関する技能である。ゲームの中ではこれらの技能をいつ、どのように発揮するかを適切に判断する力、すなわち状況判断力が重要となる。

小学校体育科における「主体的・対話的で深い学び」では、運動に主体的な関わりを持つことのできる学習者の育成が重要となる。学習者が運動に主体的に取り組み、それを継続していくためには、学習者の運動に対する内発的動機づけを促し、運動有能感を高めることが重要であるとされる。これまでにゴール型の単元において、運動有能感を高めることを意図した先行研究は多数あるが、それらの研究では共通して、活動の簡易化や振り返りノートの活用、グループ活動や教師の声掛けの工夫等を意識して指導を行うことなどを通して、児童の運動有能感を高めることができるという結果が出ている。

一方、状況判断力を高めることを意図した先行研究に関しても、バスケットボールの授業実践をはじめ数多く行われている。これらの研究成果として、状況判断力の向上にはゲーム場面において児童の「技能発揮」と「プレー選択の判断」に対して教師が言語的フィードバックを与えること、スモールステップでの指導、アウトナンバーゲームの活用などが有効であることが示唆されている。

そこで本研究では、小学校高学年のボール運動のゴール型ゲームの単元において、児童の運動有能感と状況判断力を高めることをねらいとした授業を計画・実践していくこととした。

## 2. 実践概要

和歌山市内の小学校5年生1クラス29名（男子16名、女子13名）を対象として、ボール運動領域におけるゴール型ゲームの全8時間の授業を計画した。単元計画は表1のとおりである。実施期間は、2023年10月10日～10月27日であった。今回の授業で取り扱ったゴール型ゲームは、バスケットボールの下位教材であるセストボールを実施することとした。セストボールを設定した理由は、対象児童のほとんどがバスケットボール未経験者であったため、できるだけ簡易な用具を用いてゴール型の特性であるオフザボールの動きやパス・シュートのプレー選択の状況判断力を身につけやすくすることを主眼に置いたからである。専用のボールは柔らかい素材であること、バスケットボールよりもゴールのリング径が大きく（直径60cm）、ゴールの高さも低く設定できる（今回は210cmに設定）こと、シュートエリアが360度どこからでも狙えるなど、初心者に対する簡易教材として非常に有効なものとなっている（図1・2参照）。

表1 単元計画

1	2	3	4	5	6	7	8
セストポートボールのルールを理解しよう。	たくさんシュートを打とう。	ディフェンスをかわしてたくさんシュートを打とう。	空いている人にパスを出すコツをつかもう。	チームで作戦を立てて、得点を取ろう。		リーグ戦を楽しもう。	
学習の流れの確認、準備運動	○用具準備 ○準備運動 ○本時の流れの確認						
ドリルゲームの説明 ・対面パス ・パス&シュート	・三角パス・パス&シュート			チームで作戦会議&ウォーミングアップ			
オールコート3対3	ハーフコート3対2		壁バスセストボール	オールコート3対3		リーグ戦 オールコート3対3	
		オールコート3対3					
○振り返り(アンケート)、片付け							



図1 セストボールのコート



図2 セストボールのゴール

授業実践にあたって、状況判断力の向上のための手立てとしては単元前半でアウトナンバーゲームを取り入れ、ノーマークプレイヤーの重要性を強調し、メインゲームでノーマークを活用することを意識させた。また、プレー選択の原則を十分理解し、児童のプレー選択に言語的フィードバックを与えながら指導を行った。運動有能感を向上させる手立てとしては「教材の工夫」「豊かな仲間との関わり」「教師による働きかけ」の視点に留意した。

### 3. 実践結果

運動有能感については、合計得点および3因子のすべてにおいて単元前後で有意な向上が見られた。状況判断力については、1時間目と7・8時間目に実施したメインゲームを撮影した映像をGPAIの手法を用いてプレーの適切率を集計したところ、パス、シュート、ボールキープのすべてにおいて適切率が上昇していた。このことから、本授業の実践によって、児童の内発的動機づけが高まり、さらに技能成果としての状況判断力の向上が見られたといえる。毎時終了ごとに行った形成的授業評価においては、単元を通じて概ね評定4以上の結果を示しており、子どもたちにとって「良い授業」が展開されたことが確認できた。

今後は、運動有能感の上位群・下位群の別により状況判断の適切率にどのような変容が見られるのか等、さらに詳しい分析を行うことで実践の効果を検証していきたい。